

Manfredから「曼弗列度」への変容 ——英詩の漢詩調訳に関する一考察——

張 偉雄

一八八九年、森 外を始めとする新声社の人々が訳詩集『於母影』を発表した。そのいくつかの訳詩の中に、英国詩人バイロンの詩劇 Manfred¹⁾の一節を「曼弗列度・魔語」（「マンフレッド」）と題して漢詩調に訳したものがある。その翻訳の基準は「調訳」として「従原作之意義、従原作之意義及字句、従原作之意義及韻法、従原作之意義字句及平仄韻法」²⁾と規定していた。一国の詩を他国語に訳す時、原作の「意義、字句、韻法、平仄」にまで忠実に従って、再現することが可能であろうか、新声社の人々は素晴らしい実験を見せた。訳者はバイロンのこの詩を、いかにして違う言語体系にある漢詩を以って再現しようとしたのか、また、異文化にある文字と文化を自文化に再現する時に、如何なる変容が起きるのか、この訳詩を元に検討してみたいと思う。

（一）

詩のリズムを、英詩では強弱音を用いて表現するのに対して、漢詩の場合は、音の高低変化を表わす平仄音を用いて、音の起伏を割り当て、詩のリズムをつけるのが特徴である。漢字は一文字それ自体、一音節となり、どの音節にも一定の声調がある。この声調の違いによって、言葉のリズムがつけられ、同音字の意味区別にも役割を果たしている。古代漢語ではこの声調を、「平声、上声、去声、入声」³⁾の四種類に分けている。この中で「平声」はさらに「陰平と陽平」に分け、音程的には、それぞれ陰平は高く平ら、陽平は中音から高音に持ち上げる。律詩ではこれを平韻としている。そして、上声は低音からさらに下げ、そして一気に上がっていく。去声は高音点から一気に低音まで滑って下がる。律詩ではこの上声、去声を仄韻としている。さ

らに現代北京語では消えている入声は、瞬間的に息を止める促音である。これも仄韻とされている。⁴⁾

新声社の訳者は以上のような、漢字の平仄特性を借りて、英詩の強弱調を表現しようとした。彼らの取った具体的な手法は、英詩の強拍を漢詩の平韻、弱拍は漢詩の仄韻で表わすことである。次に原詩と訳詩を比較してみよう。

Manfred

(A Voice is heard in the Incantation which follows)

When the Moon is on the wave

⊥ × ⊥ × ⊥ × ⊥

And the glow-worm in the grass

⊥ × ⊥ × ⊥ × ⊥

And the meteor on the grave

⊥ × ⊥ × ⊥ × ⊥

And the wisp on the morass

⊥ × ⊥ × ⊥ × ⊥

When the falling stars are shooting

⊥ × ⊥ × ⊥ × ⊥ ×

And the answer^{Od} owls are hooting

⊥ × ⊥ × ⊥ × ⊥ ×

And the silent leaves are still

⊥ × ⊥ × ⊥ × ⊥

In the shadow of the hill

⊥ × ⊥ × ⊥ × ⊥

Shall my soul be upon thine

⊥ × ⊥ × ⊥ × ⊥

With a power and with a sign⁵⁾

⊥ × ⊥ × ⊥ × ⊥

(⊥は強拍、×は弱拍を表わす)

戯曲「曼弗列度」の一節

魔語

波 上 熾 月 光 糾 紛
— | — | — — —
螢 火 明 滅 穿 碧 叢
— | — | — | —
宵 暗 燐 碧 生 古 墳
— | — | — | —
陽 炬 高 下 跳 澤 中
— | — | | | —
星 墜 如 雨 光 疾 於 電
— | — | — | — | — |
梟 唱 梟 和 孤 客 驚 顫
— | — | — | — | — |
殘 月 斜 射 千 壑 陰
— | — | — | — | —
風 死 林 木 渾 絕 音
— | — | — | — | —
正 是 威 力 加 汝 時
| | — | — | —
靈 咒 無 假 誰 脫 羈⁶⁾
— | — | — | —

(—は平声で、|は仄声を表わす)

訳者は漢字の特性を使い、規則正しく一字おきに平仄を変えて英詩の強弱調に合わせたのである。平声を強拍に、仄声を弱拍に当てはめて表現するというのは、独創的な発想である。漢字の平声字は、音程がわりと高くて音が伸び、高いところで止まる。反対に、仄声字は音がわりと短く、音程も平声と比べて低いという特徴がある。確かに漢字のこの平仄の特性を使えば、あ

る程度英詩の強弱を表現することが可能である。しかし、これはもはや漢律詩ではなくなる。漢律詩は厳格な規則で作られ、いわゆる律詩の三原則というものが重視されている。この三原則を、次の七言絶句を例に見てみると、

- ⊖ 平仄対立 { 平平仄仄平平平
仄仄平平仄仄平
- ⊖ 平仄相黏 { 仄仄平平平仄仄
平平仄仄仄平平 } 平仄対立
- ⊖ 平仄交差 (一聯の中に偶数の字が対立する)⁷⁾

という形になる。漢字の平仄の特性を使い、英詩の強弱を表わす場合、この三原則はもちろん守れなくなり、結局、一種の新体漢詩を作り出すことになるのである。

(二)

次に韻法に従うという訳し方について見てみたい。原詩では行末にある強音節内の母音とそれに続く子音との発音が韻脚となっている。そして、前の四行は交替に韻を変えて、一行おきに韻を踏んでいる。五行目からは二行ずつ押韻して聯を成している。

Wave	fen	紛
grass	cong	叢
grave	fen	墳
morass	zhong	中
shooting	dian	電
hooting	zhan	顛
still	yin	蔭
hill	yin	音
thine	shi	時
sign	ji	羈

ここから分かるように訳者は韻法を処理する時、音韻より形式の方、つまり詩全体にわたって、音韻がいかにか配置されているのかを重視しているので

ある。第二と第四行は原詩では ass の韻脚であるが訳詩では韻脚の違う ong を取っている。韻は原詩と違うが訳詩の第四行にも同じ ong という韻を踏む形で、英詩の第二と第四行が押韻していることを守っている。同じ例は、第一、三行と第五、六行にも見える。英詩と漢詩とは音韻は違うものの、同じ間隔で韻を踏むことで一致点を追求した。

第七、八行と第九、十行に来ると、原詩と同じ韻を合わせようと努力した。しかし、英語と漢語は元来違う体系の言語であるから、母音はなんとかして原文と同じ韻を取ることができたとしても、子音まで合わせることは容易なことではない。このような「音韻に従う」という訳し方は、もちろん完全の一致を求めることはできなかったが、全詩の音韻的な雰囲気や、詩全体のリズム感覚などを伝えることができたと言えよう。

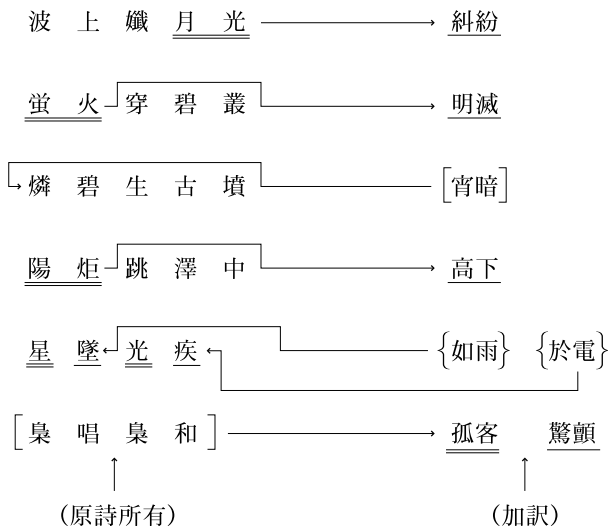
(三)

新声社の翻訳基準のもう一つは、原作の意義及び字句に従うというものであるが、まず、字句合わせについて見てみよう。原詩は第五、六行だけが八音節で、それ以外は七音節が一行になっている。訳者は七言長律という漢詩体を取って対応したが、原文の第五、六行が八音節の行であることにも配慮して、それに合わせるために第五、六行にそれぞれ一文字を張り出させ、八言に訳したのである。つまり、音節の面で完全に原詩を再現しようとして在来の七言長律の定形詩としての形を破って、工夫を凝らしたのである。しかし一方、この字数、音節を合わせる対応は、もっとも肝心な「意義に従う」にずいぶん大きな影響を及ぼしたのである。

表意文字としての漢字は一音節が一文字で、ひとつの具体的な意味を表わし、かなり高い表意度を持っている。また、古典律詩はきびしい規則の下で、ほとんどの連結詞、係助詞が省略され、具体的な概念、事物を表わす言葉しか詩に取り入れられない。このような特性があるので、英詩を字句数に合わせて漢訳するには、必然的に原詩より内容が膨らみ、拡大解釈の現象が出てくるのである。忠実に訳すことを目指した新声社の訳も、宿命的にこの点から逃れることができなかった。「マンフレット」の訳を意味内容の角度から見ると、二通りの拡大訳が見える。一つ目は、音節調整のための「加訳」である。二

つ目は、感情強化のための「改訳」である。

まず加訳について見てみると、訳詩の前半行は原文を忠実に訳した上に原文にない修飾の言葉を各行ごとに入れてある。



(=主語、一述語、[状態語、{補充語、→修飾関係を示す)

以上、原詩の音節を合わせるために、訳詩には単なる音ではなく、原詩にはない別の意味が伴う漢字をそれぞれ二字、四字と加えているのが分かる。この加訳によって、月光は「糾紛」つまり乱れ揺らめいている。「螢火」は「明滅」でチカチカと光っている。「燐碧」青白く光る鬼火は、「宵暗」つまり宵闇（よいやみ）に古墳より発生することになる。また、「陽炬」これも鬼火のことだが、「高下」上がったたり下がったりしている。さらに、星の墜ちることが、「雨のごとく」光り、電（いなずま）より「疾」、はやい。以上の光景で「孤客」が「驚顛」、驚き震えている。以上、内容的な面において、原詩とくらべて訳詩の方がかなり膨らんでしまったのである。

第二の手法は、感情強化のための改訳であるが、訳者は第七行に来ると、もう詩の意境にすっかり感情を傾入してしまい、漢詩表現の慣用手法を使い、

句の結びに感情の高揚を作り出した。

And the silent leaves are still
In the shadow of the hill
残月斜射千壑陰
風死林木渾絶音

この句の別の訳を参照してみると、次のようなものがある。

音なき木々の葉は
丘の蔭にしずもる⁸⁾

この訳は原詩と同じように、比較的冷静な客観描写にとどまっている。しかし、一方、新声社の訳は、漢詩特有の誇張性によって、原詩を拡大し変容させているのである。訳者は、無数の谷という意味の「千壑」を使って、「hill」を取り替えた。「The shadow of the hill」に関して、訳者は、夜を想定して、残月が斜めに照らして来る時に、蔭となっている山々の溝や谷を、一括にひっくるめて訳詩に駆り立てた。さらに「風死」「絶音」といった甚だしい語彙を駆使して、静けさというものを絶大に描いた。このように壮大な自然がここに用意され、訳者の創造的な訳が、次に進んでいく。

Shall my soul be upon thine
With a power and with a sign
正是威力加汝時
靈咒無假誰脱羈

ここにはいかにも神秘的で、一種の恐怖感さえ引き起こす雰囲気が漂っている。原詩の「My soul」は、ここにおいて、「威力」のある「靈咒」と変身させられ、祟り神のように、「汝」にかぎらず、誰をも逃がすことなく、襲ってくる。原詩の「power」や「sign」は、漢詩に変身させることによって、狂

暴な淫力となり、恐ろしい魔語となった。別の訳では、「かかるとき、わが魂は力と徴表もて、おまえの魂を訪おう。」⁹⁾となっている。このような訳だと、漢詩の束縛がないために、原意を淡々と置き換えることができた。しかし、ここには逆に漢詩訳にある、人を圧倒するような迫力を味わうこともないのである。

以上見てきたように、新声社の訳者は、英詩を音韻、字句などをも含めて、漢字文化圏の人々にも鑑賞できるように、漢詩という形をもって再現しようと、大きな努力を払った。しかし、漢字の表意文字としての特性、漢詩の長い伝統によって形成されてきた規則というものが、異文化としての英詩を再現させるときに大きく作用し、おそらく訳者自身も予想外な変容をもたらした。結局、本来意図していた「再現」が、「再創作」という結果となった。新声社の努力は、結果として伝統的な漢詩とは違った新しい形の詩形を作り出したのである。

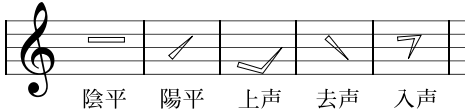
本稿が見てきた新声社の人々の、漢詩調訳を以って、原作の「意義、字句、平仄、韻法」を再現する翻訳は、伝統的な漢詩を作ることを目指したのではなく、漢字の平仄特性を生かし、英詩の特徴を最大限に再現しようとする一種の実験である。異文化を受容するときに、伝統文化を生かし、新しいものに適用させようとする努力は、今日においても、大いに評価すべきものである。

注

- 1) Byron Ōs Poems, London: Aldine Press, 1963. pp. 309–345.
- 2) 日本近代文学大系 第52巻『明治大正訳詩集』角川書店 昭和46年 106頁
「原作の意義に従い、原作の意義及び字句に従い、原作の意義及び韻法に従い、原作の意義、字句及び平仄韻法に従う」
- 3) 「平声」、現代中国語の一、二声に相当、「上声」現代中国語の三声に相当、「去声」現代中国語の四声に相当、「入声」現代中国語の共通語として
いる北京語にはなくなり、周辺にある言葉広東語などには残っている。ち

なみに現代北京語にはこの入声が消えたがゆえに、唐代の律詩などを読むとき、在来の韻律法に合わない現象が所々起きている。この場合、広東語など地方の言葉に置き換えて読むと、古代の韻律を味わうことができる。

4) 仮に五線で表わすと次のようになる。



5) 前掲 Byron Ōs Poems, p. 314.

この詩の他の訳は下記参照

訳者代表 加納秀夫『世界名詩集大成 9 イギリス I』平凡社 昭和34年 268頁

蛩は草葉に露を吸い
 隕石塚の上に落ち
 鬼火は沼地に燃ゆる。
 流れ星尾をひき、
 ふくろ鳥呼びかわし、
 音なき木々の葉は、
 丘の蔭にしずもる、
 かかるとき、わが魂は力と微表もて、
 おまえの魂を訪おう。

6) 前掲『明治大正訳詩集』149頁

7) 王力 主編『古代漢語』第四冊 中華書局 1964年 1514-1526頁参照

8) 前掲『世界名詩集大成 9 イギリス I』268頁

9) 同上

(比較文化・日中交渉史／文化学部教授)